

有機農業は生命と環境に貢献します

南 堃 幸信

日本国農業政策の大転換「みどりの食料システム戦略」とそのお手本となった欧州の Farm To Fork 政策のストーリーを前回レポートしましたが、実は、双方とも“人々がオーガニックを摂取した健康づくり”を主たる目的としておりません。

では、なぜ今、オーガニックなのでしょう。

1つ目は生物多様性の尊重であり、2つ目は地球温暖化防止の CO2 削減によって農業の取り組みに変化をもたらしている。

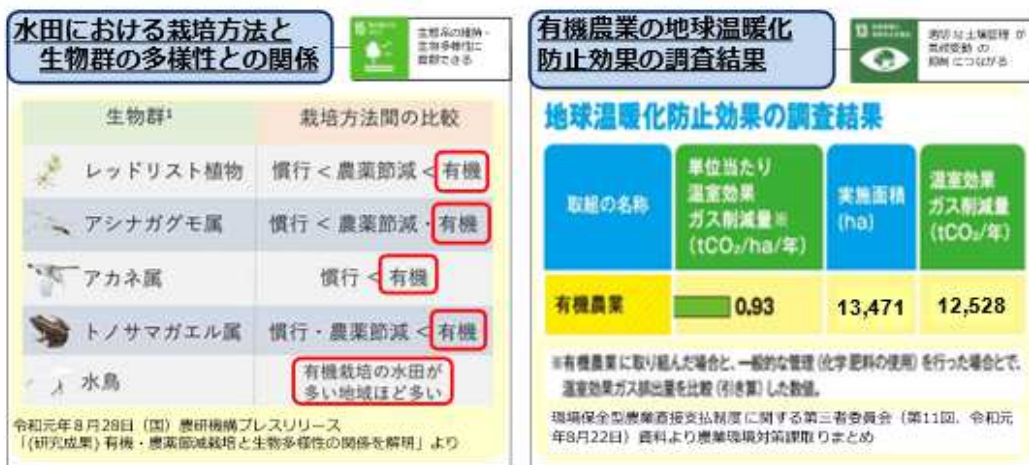
以上が現在の世界の大きなトレンドです。

生物多様性ですが、農地や周辺で生息する生物は、明らかにオーガニックの多様性に貢献しています。

化学農薬を使用しないということで田畑の昆虫などの生き物が豊かになり、それを食する鳥等の大きな生物が育まれ、自然本来の食物連鎖の中で、全ての生命が育まれるという好循環が順調にコントロールされます。

有機農業の効果

生物多様性の保全や地球温暖化防止に貢献



兵庫県の豊岡で進められる「コウノトリ米」の取り組みですが、田のドジョウやタニシ等の生き物を餌とするコウノトリが、化学農薬の多投による餌の消滅で絶滅寸前となっており、コウノトリ復活の為、餌となる生物が田に増えるよう農薬を使わない取り組みを生産者と消費者が力を合わせ、取り組むプロジェクトです。

リストにある絶滅危惧種として指定されている希少な生物の多くが、オーガニックの取り組みによって絶滅の危機を乗り越えようとしています。

オーガニックは農地の周りにおける生物多様性を復活させ、生態系のメカニズムを本来のあるべき姿に取り戻す取り組み といえます。

また、オーガニックの効果として CO₂ が土壌に貯留されることで、地球温暖化防止に貢献しているということを示します。

一般栽培で使う化学肥料は、イオン化して水に溶けるように設定されたものであり、無機物ゆえ C(炭素)は持っていません。

この肥料を使っても C は土中に貯留されません。
つまり温暖化ガスの減少には何ら貢献しておらず、それに比べて堆肥等の有機肥料は、その構造から必ず C を含有しています。

オーガニックは、大気中の CO₂ を土中に貯留し、地球温暖化防止に貢献できる農業ということになります。

オーガニックを農場の主軸に！という取り組みは、生物多様性の確保と地球温暖化防止の取り組みと繋がっている と言えます。